

異世界との邂逅、その序章。

アホを極めたらこうなる

騎士くんとスバルが仲良くなるよっていうお話です。

今更（プリコネの）リゼロコラボのストーリーを見て、あふれ出る妄想を抑えきれず欲望を全開にして書き殴りました。楽しかったです。

中身があるかは……（目そらし）

駄文、キャラ崩壊、また自己満足のため内容が無いよう（氷点下）に注意です。

目次

異世界との邂逅、その序章。

異世界との邂逅、その序章。

ランドソルの大通り。

いつもはこの時間には閉まっているはずの飲み屋には、まだ明かりが灯っていた。

「んっ……ぷはあっ！」

豪快にジュースを飲みほし、満足そうに笑う少年が一人。

「もう、スバルっつらはしたくない……」

銀髪の綺麗な少女がそう呟く。

スバルと呼ばれたその少年は、大袈裟ににんまりと笑って話しだした。

「せっかくの祝勝会なんだ、これくらいやってもいいだろ？ いや、むしろこれ

くらいやらなきゃ祝勝会じゃないとまで言える」

「え、そ、そうなの……？」

スバルの断定的な言い方に、銀髪の少女は戸惑いの声を上げた。

「ああ。どうせなら、エミリアたんもいつきに言ってみる？」

エミリア。そう呼ばれた可愛らしい少女が、スバルから手渡されたジュースを

握った。

「ほら、ぐいっと」

スバルが急かすように言う。

それに押されたのか、可愛らしくジュースを両手で持ったまま、エミリアがコップへ口を当てた。

少し戸惑うようなそぶりを見せた後、それを振り払うかのようにゴクゴクとジュースを飲みほしていく。

「んんっ……」

慣れていない様子で飲み干していくエミリア。

「ん……ぷはー！」

最後はスバルのを真似て、ぎこちなくそんな声を上げた。

「おお、そんな感じそんな感じ」

うむうむ、とスバルがうなずいていると、その後ろからひよこりと女の子が現れた。

全身を甲冑に包み腰には剣を差している、という物騒な姿に似合わない、朗らか

な笑顔と明るい声でスバル達に声をかける。

「おお、あなたもなかなかいい飲みっぷりですね☆」

「あ、ペコリーヌさん。これはその、ちょっとはしたないかな、って思ったんだけど……」

「いえいえ、それくらいが丁度いいですよ！　こういうときはぐいっといくにかぎります☆」

ペコリーヌがニコニコと笑いながら、飲み干すようなジェスチャーをする。

「うんうん、ペコリーヌさんはよくわかっていらっしやる！」

スバルが首を縦に振りながら同意する。

「やっぱりこういう時は、少しくらい羽目を外すべきだと思っただよな」

「私もそう思います☆　今日は祝勝会ですしね、ちょっとくらい大袈裟に楽しんじゃっても誰も文句は言いませんよ！」

「そ、そう……？」

エミリアが戸惑っているのを見て、ペコリーヌが手をぼんと叩いた。

「それじゃあ、私がこういう時の楽しみ方を教えてあげます☆　ほら、最初はこの

魔物の唐揚げからー……」

「え、えええ!!」

エミリアが何かをいう暇もなく、あっという間にペコリーヌが連れ去って行ってしまった。

「あ、行ってしまわれた……」

その場に一人残されたスバルは、誰か話し相手がいらないかと周りを見渡す。

レムとラムはコッコロと話し込んでいるし、パックはキヤルとじゃれて遊んでいる。もっとも、キヤルはどこか嫌そうな顔をしているが……。

大方、からかって遊んでいるのだろう。初対面の人……人？ 獣人？ にそんなことができるとは……。怖いもの知らずだなと、パックを変な方向で再評価していた。

キヤルの性格をなんとなく把握していたスバルだったので、余計にそう思ったのだろう。実際、スバルが同じことをしたら、キヤルに魔法で吹き飛ばされてしまいかねない。

パックを内心ですげえやつだと褒めつつ、そのまま目を滑らせていくと、一人で

肉にかぶりついている少年が目に入った。丁度いい、話したいこともあった。そう
思い、その少年へと近づいていく。

「よう」

短く声をかけると、少年が顔を上げる。

「ああ、よう……？　こんにちは？」

「それを言うならこんばんは、な」

ぎこちなく挨拶を返す少年に、スバルが訂正する。

「ああ、ごめん。こんばんは、スバル」

少年は律儀に間違いを謝罪し、訂正して挨拶を返した。

「いや、別に責めてるとかじゃないぞ？」

少年の隣に座りながら続ける。

「なんというかさ、お前、本当に記憶喪失なんだな」

スバルはコッコロ達から、少年がそのようなものになっていると教わっていた。
が、見る感じ普通に受け答えができており、それにノストラダムスとかなんとか
言って接触した際にも、全く普通の会話をするので、今まで半信

半疑だった。

だが、先ほどのやり取りを経て、ようやく少年が確かに記憶喪失なのだという確信が持てたのだった。

「ああ。自分では自覚、無いんだけどな。はは」

「はは、って。笑い事じゃねーだろ」

笑いながら言う少年に対し、スバルも笑いながらそう返した。

「まあ、なんというかさ、今日はお疲れ様」

「ああ、お疲れ様。……これは合ってるよね？」

「合ってる合ってる。お疲れ様、少年」

コップにジュースをつぎなおしてから、二人で乾杯をした。ゴクゴクと一気に飲み干して、二人とも「ぷはー！」と声を上げる。

「うーん、この世界の飲み物もけっこういけるよな。あっちに持って帰りたいくらい
の出来だ」

スバルがジュースの瓶を見つめながらそう言った。

「一本くらい持ってけば？」

「いや、それは俺も思ったんだけどさ。パックがダメだって」

「え、なんで？」

「なんかさ、こっちのものをあっちに持ち込んだら、変に時空がゆがむとかどうたらこうたら……」

「へー、そうなんだ」

わかって無さそうな反応だな、とスバルは思ったが、実のところスバルもよく分かっていた。かかっていなかった。

というか、パックですら自分で言っていることに確信が持てていない様子だった。ただ、そういう懸念がある以上持って行かないことに越したことはない。スバルもそれには賛成だった。それが原因でまたやり直さないといけなくなったりしたら。そう思うと、やはり安全な方を取らざるを得なかったのだ。

「ま、それはともかく。お前にちょっと聞きたいことがあってな」

「？ 俺に聞きたいこと？」

「そそ。ほら、なんだかんだあってさ、お前の名前、聞いてなかっただろ？」

「……あー、そういえば」

今までそんなこと忘れてた、と少年が頷く。

「あー、ごほん。お前だけに自己紹介させるのもなんだし、まずは改めて、俺からさせていただくよう」

のどの調子を整え、スバルが威勢よく喋りだす。

「俺の名前はナツキ・スバル。無知蒙昧にして天下不滅の無一文だ！」

キメ顔・決めポーズで少年へとスマイルを放つスバル。

少年はそれを真に受けたのか、自分もと立ち上がり、同じようなセリフ、同じようなポーズで自己紹介を始めた。

「えーっと、俺の名前はユウキ。記憶喪失にして天下不滅の無一文だ」

「……似てね？」

「結構共通点あるんじゃないかな、俺ら」

少年——ユウキが笑ってそう言う。

それに釣られてスバルも笑った。

「改めて、よろしく、ユウキ」

スバルが手を差し出す。

それをユウキが固く握って言葉を返す。

「こちらこそよろしく、スバル」



それからしばらく、二人は食事をしながら談笑を楽しんでいた。

この世界での暮らし方。スバル達の世界との文化の違い。そして何よりも――

「お前、なんとうかさ、すごいな。ハーレムじゃん」

「俺はいたって普通に生活してるだけなんだけど」

スバルは、ユウキの身の回りについて驚愕の声を漏らした。

なにせ、周りは女の子ばかり。何気ない話を聞いているときでも男が出てくることはほぼ無かったのが、その異常性を際立たせていて余計に驚きが隠せなかった。

「いやほんと、うん。11歳の子にお世話はさ、すごい」

「そうなのかな？」

ユウキが何がおかしいのかわからないという様子で首をかしげる。

会話は普通にできるのに、そういうところは忘れてしまってるのか。なんというか酷なことだ、とスバルは内心でそう呟いた。

「でもさ、それを言うなら、見てた感じレムちゃんもスバルにべったりじゃない？」
ユウキの突然の切り返しに、スバルが狼狽する。

「へ!?! いや、ああ、そうか?」

「いや、そうでしょ。エミリアちゃんだってスバルのこと気にかけてるみたいだし、スバルも人のこと言えなくない?」

「いやいや、それは……いや……うん……?」

スバルが自分の身の回りをよく考えなおすと、ユウキよりは数は少ないものの、確かに一般的な観点から見れば自分も十分多いほうだと気付いた。

途端に、さっき自分が言ったことがブーメランとなって自分へと帰ってくる。11
歳にお世話されるのもどうかと思うが、見知らぬ女の子の家に転がり込んだ自分も割とやばい立場なのではないか?

「……確かに……確かにそうかもしれない……」

「でしょ？」

もう一度自分を見つめなおさなければいけない気がする。まさかこの世界に来て、女性との付き合い方と言うものをハーレムを築いている人物から教わるとは……。スバルが自分という存在を考え直そうとしているとき、ふとユウキが話を切り出した。

「そういえば、スバル達はいつ帰る予定なの？」

「ああ、言っただけじゃなかったっけ？ 明日にはもう帰る予定だよ。エミリアが今丁度忙しい時期でさ、いくら時間の流れが遅いと言っても、やっぱりな」

エミリアの気持ち的にも、こっちに長居するわけにはいかない。エミリア以外の全員と話し合った結果、緊張を切らさないためにも、早めに帰ることがいいだろうと結論付けていた。

スバルとしてはこっちの世界の居心地は悪くなかったから、しばらくいてもいいとは思っていたのだが……。やはりスバルの一番大事なものはエミリア、そしてエミリアの都合である。そこはもうしょうが無いと割り切っていた。

だからこそ、今日中にユウキと話をしたかった。そういう意味では、ペコリーヌ

さんがエミリアを連れて行ってくれたのはタイミングが良かったのかもしれない。スバルは心の中でペコリーヌに感謝をしていた。

「そっか。せっかく友達ができたのにな」

ユウキが残念そうにそう呟く。

ユウキとしても、やはりスバル達ともっと遊びたいと思っていた。冒険をしたり、美食殿の活動を一緒にしたり。せっかく出会った縁だから、と、記憶をなくしてからもそういうものを大事にしてきたユウキとしては、出会ってすぐお別れというのはかなり残念なことだった。

「俺もこっちでもっと遊びたかったんだけどさ。そうもいかなくてな」

「まあ、スバルとエミリアちゃんの都合じゃしょうがないよね」

とはいっても、しょうがないことである。ユウキは気持ちを切り替えて、また別の話題へと話を移した。

夜はまだまだ続く。

きっと彼らは、この短い間でも強い絆をつくって、そしてこの数日で起きた異世界との邂逅を、忘れることは無いのだろう。

読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

異世界との邂逅、その序章。

著者 アホを極めたらこうなる

発行日 2019年12月2日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/208494/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
